

福島はイチエフよりも大きい

福島県立ふたば未来学園高校
教諭 小磯匡大 (世界史)



1. 被災体験

皆さまはじめまして。今回このような機会を頂きまして、いわゆる 3.11 後の福島の状況について書かせてもらえることになりました。ありがとうございます。

まず自己紹介をします。私は福島県の太平洋沿岸（浜通りと言います）にある檜葉町という所で生まれ育ちました。

近隣の、やや名が知れている行政区としてはいわき市があります。いわき市には常磐炭鉱があり、明治時代から採掘が行われていました。1960 年代のエネルギー革命で炭鉱業が斜陽になったことを受けて「スパリゾートハワイアンズ」として再出発した…というお話は映画『フラガール』などで取り上げられています。

いわきから北に向かうと、東京電力の火力発電所がある広野町、東京電力の福島第二原子力発電所がある檜葉町と富岡町、事故を起こした福島第一原子力発電所（通称イチエフ）がある大熊町と双葉町、東北電力の原発誘致が企図されていた浪江町があります。明治以降、労働力や石炭や電力を関東に送り出していた地域であることがわかります。これら六町に内陸二村を加えた双葉郡といわき市の「首都の下請け」的構造は戊辰戦争に由来するものと考えられますが、ひとまずそれは置きましょう。

私が住む檜葉は本屋もない町で、大きな買い物は富岡やいわきまで足を運んでいました。小さな町が合併しないでいられた背景にも原発の恩恵があるのでしょう。富岡には東電が作ったエネルギー館（現・廃炉資料館）という子ども向けの施設があり、そこでは「原発内の放射線は何重ものシステムによって漏れないようになっているのだ」、ということがゲームや冊子を通じてアピールされており、「事故なんかあり得な

い」という主張が施設に伏流していました。ちなみにエネルギー館の近くには「アトムボーイ」というすごい名前の回転寿司屋があり、原発の町であることを誇っているようでした。

私が生まれたのは 1982 年ですので、このようなアピールは、チェルノブイリ後の「あれはソ連だから起こった。日本の原発は安全なんだ」という薄弱な根拠の上に立った言説の瀰漫だったのでしょうか。双葉町にあったことで知られる「原子力 明るい未来のエネルギー」という標語看板もこの頃に作られたはずです。

檜葉を離れ、大学では民俗学を専攻し、高校の世界史教師として福島県に戻りました。浜通り北部にある相馬市の高校が初任地で、その年度の 3 月 11 日に東日本大震災が起きました。

つい 10 日前に卒業した生徒が、在校生の家族が、本校に入学するはずだった生徒が、そして多くの家屋と人びとが大切にしていたものが津波に飲み込まれました。生徒と職員は町の体育館に避難しましたが、私のアパートは無事でした。当時の日記にはこうあります。「生徒を送り、いったん家に戻る。自衛隊の車が市役所の前にあった。妻は無事であった。よかった。食器がさんざん割れ、棚の物もズンドコに落ちたよう。TV の津波の映像がすごい。仙台空港が水浸しだ。妻は憔悴していたが、ご飯を出してくれた。温かいものがある。8 時半、また自転車で避難所に戻る。生徒にチョコを配る。だいぶ避難者が増えていた。他の先生に「奥さんのところ戻りな」と言われたので失礼した。家に帰れなくなった生徒がかわいそうだ。自衛隊の車とすれ違う。実家に電話するとみんな無事なようであった」。

日記に原発のことが出てくるのは翌日のことです。

「新聞は来ていない。土曜特集と広告だけ来ている。いらぬ。パンを食う。実家に電話をかけるとおじ家族もそこに避難してきていることが分かった。心配なのは原発だ。実家の近くの範囲まで避難勧告が出ているので、仕事で出ている父が戻り次第、どうするか決めるとのこと。

余震が続く。慣れてきた。テレビで隣町の線路がズタズタになった様子や、宮古の津波の映像を見ておのく。洋間の整理をし、またニュースを見る。天気がいいのが救い。

家の前の道を救急車、消防車合わせて19台が通った。昼食は焼きそば。固定電話が不通になった。買い物へ行く。天気は快晴だが埃のにおいがする。道路に一部段差ができていた。デイリー、セブンイレブンとも閉まっていた。

3時ごろ戻ると福島第一原発でセシウムが漏れたというニュースが流れていた。

少し寝る。5時半ごろTVをつけると第一原発の建屋の天井崩壊。6時前に官房長官の発表。檜葉の実家も避難圏になった。風呂にはいる。避難所にいる生徒や先生のことを思うと申し訳ない。7時ごろ避難範囲がさらに20キロに。昨日家族の安否を確かめてそれで終わりだと思っていたのに。実家との連絡がまだつかぬ。

20時44分、原発の爆発は原子炉格納容器が爆発しただけでなく、放射能も低下していることが報じられた（漏れている？）。海水を使った冷却に取り掛かるという。相変わらず余震。22時、母の実家から電話があり、両親がそこに避難したことが分かった。祖母と犬は自分の意思で家に残ったという。ネットで調べると第一原発から実家は直線距離14キロ。

この周辺自治体への避難勧告によって浪江町では津波被害者の捜索が打ち切られています。おそらく助けられた命が原発事故によって失われました。

14日は月曜だったので学校へ向かうと、部活動の場所でもあった旧体育館が遺体安置所になっていました。

この日の三号機爆発は職員室のテレビで見ました。私も含め、先生方みな呆然とする他ありません。職員会議で自宅待機が決まり、私と妻は妻の実家の仙台に避難しました。檜葉の家族はその後各地を転々とするようになります。

また日記を引用します。

15日「ひきこもっている。避難圏が20キロから30キロ圏に拡大された。発表される放射線量がマイクロシーベルトからミリシーベルトになった。あまり気にしても仕方がないが鬱々とする」。

16日「余震がこうも多いと最初の、ズン…という衝撃を吟味すれば、その地震の規模が予測できるような気がしてきた。地震ソムリエ」。

19日「夜のニュースで福島県川俣町の牛の乳から放射性物質が観測されたことが伝えられた。自分が思っていた以上にショックを受けた。それは放射性物質の汚染が地産地消を汚している、ということがわかったからだ。それはしばらく相馬のうまい魚や、実家で作る米が食べられなくなる可能性を示していた。小便をしに外に出ると満月だった。満月を見ながらしばし呆然とし、自分に詩心があるなら月光の浄化力を持つ歌をつくるところだ」。

地産地消を通じて自分の細胞の一部になっていたふるさとが、放射能で汚染されたと感じたから…そこらへんが私の「ショック」の根拠かと思われまます。

相馬高校は避難区域外だったため4月19日に入学式を開くことができました。壁に大穴が空いた体育館での式です。新入生の服装がバラバラでいたまじさがありますがそれでも嬉しいものです。

私が副担任に入っていた新二年生の学年主任で浪江町出身の松村茂郎先生は始業のあいさつでこう言いました。

「福島県人は被害にあっている。人類が経験したことのない苦しみの状況にある。しかし、世界中から注目されている「フクシマ」人の生き方は、生き様は、世界中の人たちに希望を与えるものでなければならぬ。勘違いをしてはいけません。私たちフクシマ人が世

界から希望をもらうのではない。私たちの生き様が、世界に希望を与えるのだ」と。

松村先生は読み上げながら泣いており、それを見た男子が「松村先生泣き虫なんだな！」とからかいました。しかしその彼もまた泣いています。

私にとって今なお、福島での教育を考えるにあたり大切にしている言葉です。松村先生の浪江での被曝、生徒の安否確認と卒業までの奮闘は朝日新聞特別報道部『プロメテウスの罠5』に収録されています。

檜葉町は結局3月12日の夜以来立ち入り禁止となり、家族は父の退職金でいわきに家を購入し、現在もそこに住んでおります。飼い犬と祖母はそこが終の棲家となってしまいました。犬はともかく、80年近く暮らしていた町、ご近所の関係性から離れざるを得なくなった祖母の状況を思うとこみ上げてくるものがあるのですが、本人は少なくとも表面上は恬淡としており、ぼとりと花が落ちるように、ある日死にました。

2. ふたば未来学園

先に震災後の浜通りの高校教育の動きを述べておきます。避難区域内にあった学校は、それぞれ別な地区の公的施設や他校の施設を借りて「サテライト高校」として運営され、相馬高校でもふたつのサテライト校を引き受けました。

双葉郡にあった5つの高校は休校を余儀なくされ、それらのカリキュラムと校旗を引き継ぐ「ふたば未来学園」が2015年に広野町に開校しました。双葉郡唯一の、そしてイチエフに最も近い高校です。開校の経緯は朝日新聞特別報道部『プロメテウスの罠8』に記載されていますのでよろしければご覧ください。

私は2018年に赴任し、現在も勤務しています。本校は地域社会が「生まれ変わり」を迫られたことをかえって奇貨とし、新たな教育活動を試みています。

高校一年次には被災地バスツアーと取材を通じて、立場の違いから生じる課題や、複雑に絡み合って解が見えない課題を題材とした対話劇を創ります。このことで協働性、寛容性などコミュニケーション力や本質

をつかむ力を身につけます。

二～三年次の「総合的な探究の時間」では、地域の問題の解決に向けた実践プロジェクトを創出します。本校で「未来創造探究」と呼ぶその授業において、生徒は自らの興味関心に従い、探究活動を行います。

これらは震災および原発事故によって先鋭化した高齢化や過疎化などの課題に加え、原発事故特有の課題、そして持続可能な循環型社会をめざすためのグローバルな課題に向き合っていくことを目的とした教育活動です。

フクシマというフィールド自体にも注目が集まっています。灘高で東北合宿を企画した前川直哉先生はその目的をこう語ります。「被災地域を実際歩き、自分の目で見て多く方のお話を聞く。課題に取り組む「カッコいい大人」たちの姿を見る」と。

先にも述べましたが、震災と原発事故がもたらした問題に加え、それにより日本の地方が抱える、高齢化や過疎の問題が加速してしまいました。私が小さい頃あった、地区のお祭り、農家の信仰（私はこの庚申信仰のレポートで大学に入学できました）はすでにありません。これは3.11によるコミュニティの分散によるものでなく、離農や少子化によって3.11以前に消えつつありました。このような事情で「正解のない問い」に直面せざるを得ない場所となってしまった福島を、前川先生は逆に「課題の多さは、福島の教育の強み」と表現しています。

ふたば未来学園は原発事故を起こした双葉郡に唯一ある高等学校であり、だからこそ「被災地」を手近に「教材化」できる唯一の高等学校になっていると考えています。

授業時間で行う演劇と探究の他に、「社会起業部」という変わった名前の部活動では、地域を「知る・伝える・盛り上げる」ことを目標に掲げて活動しています。私が顧問になった昨年度は、フクシマに関心を持つ他県の高校生・大学生と交流し、被災地を案内するなど現状を知ってもらう活動を行いました。また、気仙沼や水俣などへのフィールドワークを行い、津波の

惨状や、原発事故と水俣病の構造的類似を学習しました。

3. アニミズム世界に対する申し訳なさ

「フクシマや山河草木鳥獣蟲魚砂ひとつぶまで選挙権あれ」。今回「倫理的」というテーマを頂いたとき、真っ先に思い出したのが水原紫苑さんのこの短歌です。そのわけを考えるにあたりもう少し震災後の思い出を振り返っていきたくと思います。

2011年の夏に、復興関係者の車で警戒区域に指定されていた檜葉に入りました。以下日記より引用します。

「使い捨ての真っ白なつなぎと青い帽子を渡された。それを着て町へ。家の入口で下ろしてもらい、玄関にむかって小路を登ってゆくと、まず目に入ったのは庭の雑草であった。草取りをしないとこんなにも繁茂するのかと、俺の背丈ほどになった草に驚く。ひと気のない家。薄く積もった埃が、そこにしばらく人間が住んでいないことを物語っており、さびしさを感じさせる。カーテンと窓を開け、仏壇に線香を、氏神である外の稲荷社に持参した油揚げをあげた。

家の周りをうろつく。小動物の白骨が隣家の庭に落ちていた。おそらく餓死した猫のものだろう。動物関係でいえばこのへんにも放された犬や牛がいるという。道路には乾いたそれらの糞が落ちていることからそれが分かる。

家に戻る。トイレに行くと、入るなりクモの巣が顔について嫌な感じ。ふたつある俺の本の部屋はどちらも本が散乱していたので、仕方なくそれらを踏みながら崩れた本棚を立て直した。ひとつが北側にある部屋なので、電気がつかないと何も分からない。滞在時間の2時間ではどうにもできないので、とりあえず足もとの本から整理し、一時帰宅は終了した。次に帰れるのはいつの日か。「3月」のままめくられずにいた居間のカレンダーを思い出しながら考えた」

2011年秋の日記にはこのようにあります。「住民が誰もいない中、ふるさとに季節が流れている。秋にな

り放射能のそよ風のなか、庭のあけびは実を太らせ、固いユズに色がさし、山のオニグルミは青い実をつけている。しかし、クルミを採る者も、田の稲を刈る者も、銀杏を拾う者もない。毎日茶と飯と香が供えられた仏壇に、月二回油揚げが供えられた氏神の社に、彼岸にはぼた餅が供えられた墓に、手を合わせる者は誰もいないのだ」。

さて、「次に帰れる日」の「次」は一年後でした。この時（2012年夏）は警戒区域が解除され、避難指示解除準備区域となっていました。日記には以下のようにあります。

「町に続くひと気のない県道で車を飛ばしながら、誰に阻まれることなく原発事故以来ふるさとに帰れる、という高揚を感じていた。県道から町道に入ると、道路脇の夏草がアルファルト部分にまで大いにはみ出していた。俺が芭蕉なら一句できそうだ。

田にも夏草が生い茂っている。子供のころ、父や祖母が稲刈りをする脇でイナゴをとった田んぼも例外でなかった。

まず墓参り。うちの二基の墓石は倒れ、台座も崩れていた。隣の墓は納骨室が見えそう。同じく墓参りに来ていたSさんという近所のおじさんに出会った。Sさんは「諦めついたか。帰ってきて。アキラメ」と俺に言った。まるで自分自身に言っているようだった。

家に行く。家の屋根の瓦の隙間からも草が、特に庭は背丈以上のものが生え、羽虫が夥しく跋扈している。空間線量は1.2マイクロシーベルト毎時を示していた。玄関脇の父の植木はすっかりしおれており、中に入ると、畳の一面にほこりが積もっていて不愉快になる。人が住まない家とはこうなるのか。

仏壇（すでに位牌は持ち出しているが）と神棚に手を合わせ、外の氏神にも持参した油揚げを供えた。

帰路、県道35号線を南下していわきに向かう。来た時よりも思いっきりアクセルを踏んで、俺の育った檜葉町を出た」。

このような当時の感傷的な文章を読み返してみると、仏壇、氏神社、墓という単語が毎回書かれている

ことに気づきます。また、ユズ、クルミ、稲など口にしてきた、そして今は得られないふるさとの恵みの列挙で哀切を表現しているようです。それはどこに由来しているのでしょうか。それは1932年生まれの私の祖母の年代が持っていた、人間が生態圏に見出していた深い共感情だと思われます。

このマインドは、魚を「天のくれらすもん」としてすなどっていた水俣の漁民にも見られたものでしょう。祖母は周りの自然を、ただの資源とはみなしていませんでした。まるで自分の存在の一部であるようにあるいは、自分が周りの自然の一部であるように感じていました。この共感情のもとでは、田畑や山川は単なる作業場でも資源でも固定資本でもなく、自己をはぐくませ、死後は「祖霊」となって還るアニミズム的時空間とみなされていました。

祖母が生前、大学生の私に言った言葉が忘れられません。檜葉に戻るかどうかは分からない、と話す私に対して「じゃあ誰が先祖さま守るんだ」という意のことを方言で言ったのです(祖母が死んで、私の中の「方言」も消えつつあります。これも悲しい!)。おばあちゃん子であった私は、何となくそういったマインドを引き継いでいるのでしょうか。それにより人間の営みによって透明に汚されたふるさとの「山河草木鳥獣蟲魚砂ひとつぶ」にまで、ある種の申し訳なさを、同時に自分が汚されたような悲しさを想起させたのかと思います。ただ、日記には雑草やクモは嫌悪的に書いており、あくまで人間生活を基準とした生態圏であることも分かります。祖母もムカデには容赦しませんでした。

2020年に私は妻子とともに檜葉に戻りました。季節ごとの墓参り、月に二回氏神社詣でができることを嬉しく思いますし、自分がかつて浸ったアニミズム世界を子どもたちにも知ってもらえることも幸せなことだと思います。

しかし今なお、大熊町や双葉町は帰還困難区域が多く残っており、この地域では残念ながらアニミズム世界との交差を回復させる復興ができない状態です。

4. 原発に対する思い

震災の翌年、相馬市の宇田川でシャケが遡上しているのを見ました。海から4～5キロ離れた場所でしたが大量にいます。あの恐ろしい波が来た海から、恵みの群れが里に登ってきていたことに感動しました。そうです、地震と津波だけなら自然の回復力が災害の傷を癒したことでしょう。しかし原発事故はそう簡単におさまりませんでした。シャケが来た海は、何億ベクレルもの汚染を受けた海でもあります。

初任者研修時に「原発事故が起こったら」という学校マニュアルが紹介されました。正直言って私もまた原発の安全性を無批判に信じており、「起こるわけないでしょ、事故なんて」という気持ちでそのマニュアルを読んでいました。数か月後、まさしくそれが現実になるとも知らず。

3.11後、自分の中で原発事故と折り合いをつけるため小説を書きました。ただ、イチエフを描くのはあまりに直截すぎたため、チェルノブイリ原発事故を下敷きに『ネフスキーさん!』という作品を作りました。幸い評価を得て2017年に福島県文学賞と審査員の松村栄子氏により第159回芥川賞推薦を頂きました。

(DL できます。 <https://booth.pm/ja/items/3098563>)

無批判であったことは、事故によってはじめて自覚された反省です。今の段階で原発の倫理的側面を考えた場合、①過酷事故、②被曝労働者、③ウラン採掘に伴う問題、④放射性廃棄物をどうするか、の問題がある、と私は考えます。

また、そういったデメリットのしわ寄せが弱者に向かうこと…たとえば「危険だから田舎に立地させる」「同じ被曝でも子どものほうが影響を受ける」「貧しい国ほど被曝(ウラン採掘・廃棄物)を受け入れざるを得ない」という現状も差別的であり容認できない点です。

原発の経営は、非人道的であればあるほど安く電力を生産できます。すなわち、原発建設を地方に押し付け、ウラン採掘の被曝も保証せず、安全神話を信じ込

ませ、廃棄物もどこかに押し付け、津波を予見しても対策をせず、事故が起こっても「放射能は無主物」と主張する…というやり方であれば、利益が大きくなります。「3.11 後、原発のコストがかさむ」というのは倫理にもとる政策が多少は正され、本来払うべきコストが計上されるようになってきた…からかもしれません。

ここで大急ぎで言わなければいけないのは、福島県双葉郡の住民にとって、原発は大きな経済効果を間違いないもたらしていた、ということです。

冬季の出稼ぎはなくなり、正月も家族で過ごせるようになりました。住民にとって東電はありがたい存在でしたが、しかしあくまでそれは「片思い」だったことが事故後明らかになってきました。

水俣住民とチッソとの関係も同様です。チッソ擁護したいという住民の気持ちをチッソの側はくみ取らない。交渉の場面でチッソは「これは単なる交渉事ですから」と命に値段をつけました。

原発事故に何か意味があるとしたら、そういった非倫理性を見直す契機とすることかと思います。そうでなければ双葉郡の土地は、人は、意味なくただ汚され捨てられることになってしまいます。

私がそうであったように、世間の多くの人が事故によって原子力や現代社会について考えざるを得なくなっています。考えなくてもすんでいた過去を「幸運」とみることもできますが、考えざるを得ない状況を、気づきを得られる機会と捉えたく思います。そうしなければ（繰り返しになります）事故が起こった甲斐がない、無駄な犠牲になってしまいます。

双葉町に原子力災害伝承館が開館した際に、私は柳田国男の『遠野物語』を思い出し、その前書きこそ、伝承館に求めたいスタンスだと気づきました。

その前書きとは「願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」というもので、これを「願わくはこれを以って現代人を戦慄せしめよ」とでもすれば、まさしく私のルサンチマン含みの情念が憑依できる言葉だと思います。

しかしこの言い方だと、まるで私が「現代人でない」ような言葉であり、原発との距離を隔絶してしまう口ぶりです。私は親族に東電関係者はいないのですが、さきに述べたようにエネルギー館などでの子どもの頃から「原発は安全だ」ということを無批判に信じていました。

私たちは東電に「騙された」側であります、同時にそういう意味では、「騙す側でもあった」わけです。東電ではないにしろ東北電力の原発でつくった電力の享受者でもあるし、東電の経済恩恵を間接的には受けているはずですから、「山河草木鳥獣蟲魚砂ひとつぶ」にしてみれば、加害者の一員でもあります。

水俣の緒方正人が「自分もまた近代文明の恩恵を浴していた『もうひとりのチッソ』だ」と気付いたように、私自身もまた原発由来の電力を享受していた「もうひとりの東電」としての現代人だということには自覚的でいたいと思います。自覚したうえで、現代消費社会における人間と、巨大化した資本主義を考えていかねばいけないと思います。

原発事故によって、フクシマが受けた傷は、治らない傷です。岡部兼芳が「障害」と表現したそれと、付き合っていかなざるを得ません。

昨年、社会起業部の水俣研修を通じて水俣の風土にひたり、水俣の大きさを感じました。水俣が水俣病より大きいように、福島もまた傷自体を包摂してなお余力のある存在だと思います。

これを読まれた皆様にはぜひ福島を訪れ、伝承館などで私たちが生きた「現代」を自分事として「戦慄」するだけでなく、福島の風土の良さもぜひ体感していただければと思います。

福島はイチエフよりも大きい、そう信じています。